

トムソンの『怠惰の城』と怠惰の系譜 (4)

出 羽 尚

(第46号よりつづく)

III メランコリーの両ベクトル

勤勉の騎士が、農業と結びつく労働や勤勉の寓意像との対応を見い出せたのに対して、怠惰の魔法使いは、伝統的な怠慢 (sloth) の寓意像と単純には結びつかない。しかしこの事実は、トムソンが怠惰に怠慢を含む複数の特質を含意しているという先行研究の指摘を踏まえれば、むしろ当然だろう。何もしない怠慢に陥るのは魔法使いではなく、魔法使いや城の雰囲気に関わされる自堕落な人々の方である。道具を放棄して無為に寝転がる怠慢の擬人像はリーパの《怠慢》(図53)に見たところだが、なるほど、この姿は怠惰の城で放縦に耽る人々に相応しい(図8、図10、図23)。

怠慢は己にも社会にも利益をもたらさず、最後には己と社会のいずれをも破滅させるが、魔法使いの誘いによって城に入った住人の中には、心身穏やかに黙想を重ねることによって「壮大なる思想体系を構築する」ような素晴らしい才能の持ち主や、「洗練された感性を具え」た「確たる精神」(第一章59節、65節)の持ち主もいて、彼らはその思想を伝えることで、また、その感性を発揮することで、周囲を啓蒙し楽しませるとする善をなす¹¹⁸。こうした善につながる徳を涵養するのであれば、その点において怠惰の城は公共に資する場と見なすこともできる。

公共善を生むか否かという視点で見ると、怠慢は快楽を自己の内で享受し善を生まない怠惰であり、精神の安寧や黙想は徳を外に発揮して善を生む怠惰である。善を生まない怠惰は利己的で内に閉じ、善を生み出す怠惰は利他的で外に開く。この怠惰の両向きのベクトルは、メランコリーの二つの特質、つまり、内向きの塞いだ心的傾向と、外向きの創造力の源泉という二つが向く両ベクトルと共通する。事実、トムソンも怠惰を気鬱 (spleen)、すなわちメランコリー (melancholy) 的な特質を持ったものと理

解している¹¹⁹。

1. メランコリー概念

人体の四体液のひとつである黒胆汁に由来し、古代ギリシアのヒポクラテスが医学用語として使われて以来、メランコリーは鬱病として見なされてきた¹²⁰。同時に気が塞ぎ無気力な心的気質としても理解され、キリスト教の教義にあてはめられた時、七つの大罪である怠け (acedia) と同一視された¹²¹。また、1621年に出版されたロバート・バートンによる医学書『メランコリーの解剖』でも、メランコリーの主因は怠け (idleness) や孤独にあるとされた¹²²。

一方で、古代よりメランコリーは「神聖なる病」としてその卓越性を認められてきた¹²³。トムソンの時代にも、ジョゼフ・アディソンが、空想に満ちたイギリスの詩人の創作とメランコリーを関連付けた¹²⁴。また、18世紀後半以降に形成された崇高概念を背景に、ロマンティックと形容される森や荒野の風景は、危険に快楽や夢が結びつくメランコリーな風景として肯定的に評価された¹²⁵。

このように複数の特質を持つものとして理解されたメランコリーの観念は、詩歌、エンブレム¹²⁶、寓意図像集¹²⁷、そして様々な絵画表現において、悲しみ、怠け、黙考などとの関連を持って擬人化された。18世紀から19世紀にも、メランコリーは頬杖をついたり [図55]¹²⁸、勉強を示す書物を伴い下向きに頭を垂れたり [図56]¹²⁹、また、沈思する尼僧 [図57]¹³⁰の姿で描かれた。

こうしたほぼ全ての表現に直接、また間接に着想を与えたのが、言うまでもなく、デューラーの1554年の《メレンコリア I》[図58]¹³¹、片手を頬にあてた姿勢 [図59]¹³² [図60]¹³³は、メランコリー的特質を表すものとして定式化する。そして、そのメランコリー的特質は、内向きの心的特質のみならず、外向きの想像力を生み出す源泉としても理解された。ジョゼフ・ライト・オブ・ダービーの1781



図 55 ジョゼフ・マリー・ヴィアン原画，ジャック・フィルマン・ボヴァルレ版刻《穏やかなメランコリー》エングレーヴィング，紙，1765年頃，ロンドン，大英博物館 [1877,0811.559].



図 58 アルブレヒト・デューラー《メランコリア I》エングレーヴィング，紙，1514年，ロンドン，大英博物館 [E,4.116].



図 56 ドメニコ・フェッティ原画，アンリ＝シモン・トマサン版刻《メランコリー》エッチング，エングレーヴィング，紙，1729-40年，ロンドン，大英博物館 [V,9.96].



図 59 アンゲリカ・カウフマン原画，ウィリアム・ウィン・ライランド版刻《マリア》ステイプル，エッチング，紙，1779年，ロンドン，大英博物館 [1940,0306.11].



図 57 リチャード・クック下絵，ジョン・ヘンリー・ロビンソン版刻《メランコリーのオード》エッチング，エングレーヴィング，紙，1818年，ロンドン，大英博物館 [1895,1031.212].



図 60 リチャード・コーボールド下絵，W・ホーキンス版刻《メランコリー、オード》エッチング，エングレーヴィング，紙，1796年，ロンドン，大英博物館 [1863,0214.378].



図 61 リチャード・コーボールド下絵, チャールズ・ウォレン版刻
《姉妹》エッチング, エングレーヴィング, 紙, 1798年, ロンドン,
大英博物館 [1848.0708.410].



図 62 ジョセフ・ライト・オブ・ダービー《ブルク・ブーズビー卿》
油彩, 画布, 1781年, ロンドン, テイト [N04132].

年の《ブルク・ブーズビー卿》[図 62]では、片肘で頬杖をつく横臥の姿勢を取るモデルは、怠慢 [図 53]ではなく、思索に耽り想像力を発揮する人物として描かれる¹³⁴。また、1798年に出版された『姉妹』の挿絵 [図 61]のキャプションを読むと、「キャロラインがメランコリーな物思いに耽っていたところ、サーチュウェル夫人の姪がやってきて邪魔される」とあり¹³⁵、メランコリーが想像力を働かせる夢想状態と理解されていることが分かる。

1755年のジョンソンの『英語辞書』では、メランコリーには3つの意味が規定されている。その定義によると、メランコリーは第一に「黒胆汁が増えることによって進むとされる病」、第二に「精神が常に一つの対象に向かう狂気の種類」、そして第三に「ぼんやりと沈んだ不機嫌な心持ち」である¹³⁶。この第二の意味から派生した形容詞メランコリックが「想像力に溢れた fanciful」状態を意味する通り、メランコリーはとりわけ18世紀以降、想像力の発

露の源として、積極的に理解された。

トムソンの描く怠惰が、利己的な快楽を求める傾向と黙想を通して想像力を発揮する傾向の二つの方向性を有する点でメランコリー的であることは、サンプルックが指摘する所であるが¹³⁷、そもそも、18世紀イギリスの文学では、17世紀の革命期に途絶えていたメランコリーの主題が、再び文学の主要な題材として取り扱われるようになっていた¹³⁸。

2. トムソンのメランコリー

トムソンも『怠惰の城』で、メランコリーと同義の気鬱 (spleen) と気塞ぎ (vapour) の語¹³⁹を用い、気分が落ち込んだ心的状態、あるいはそうした心的状態を引き起こす心気症 (hypochondria)、さらには天才の源泉など、複数のメランコリー的特質を扱い、これらの特質を怠惰の城の住人に与えることで、この城をメランコリー的な空間とした。

例えば、怠惰の城の物憂げな離宮では、女性たちが徒に時間をつぶすばかりで、「忍び寄る気塞ぎの神のご機嫌を伺っている」(第一章72節)。彼女らは時折起き上がって歩きだそうとするのだが、結局、ため息をついて寝椅子に横たわって怠けるばかりである。こうした怠け者が最終的に投獄される地下深くの陰鬱な土牢には、「悶々と悩める女、気鬱の本家本元、心気症夫人」(第一章75節)がいた。塞いだ心で無気力に過ごす人々がいる怠惰の城は、内に向いたメランコリー的な場である。

離宮の女性たちのように、気鬱や気塞ぎが怠けと関連付けられる一方で、気鬱を抱えた心気症婦人については、次のようにも語られる。

こういう人を狂人と見る者もあり、天才と見る者もいる。(第一章75節)

この婦人は「この世の中のありとあらゆる病気を／背負い込んでいると思って、心うろたえ」(第一章76節)る状態で、実際に彼女の天才が発揮されることはないのだが、内に向く気鬱が人を破滅させるのとは逆のベクトルを持った、天才を外に発現させる気鬱の存在が認められる。

そして、実際に気鬱から天才を発揮する人物もいる。この城の中にいる「注目に値する男」(第一章57節)だ。彼は無気力な怠けた住人たちと同じように、日がな一日自然の中で無為に過ごしているよ

うに見える。しかし、心の落ち込む気鬱に陥る周囲の友人とは対照的に、彼は「深遠な思想」を頭の中で巡らせ、その精神の働きによってあるとき燃えるような天才の発現を見せる。

さりとて何も考えず眠りこけて過ごしていたわけではない。／何故ならばしばしば、ぼんやりとした精神の残り火の中に／隠れ潜んでいた天与の霊火があつと言う間に燃え上がり、／もって生まれたあらゆる才能が次々と姿を現した。(第一章 59 節)

このように、気鬱や気塞ぎは、内に塞いだ心の落ち込みを引き起こすこともあれば、外に発現する創造を生み出すこともある¹⁴⁰。この天才を発露させるメランコリー (melancholy) について、トムソンは『四季』の「秋」で既に取り上げている。

秋風の中には、人々を哲学的メランコリーの境地に／誘う、不思議な力が宿っている。／その感化を受けると、急に涙脆くなり、／激情に頬を赤らめ、言葉少なになり、／表情は穏やかだが、内心はどきどきで、／数多の精神的煩悶に、心は千々に乱れる。／だが、人心に悪影響を及ぼすどころか、／想像力を大いに高め、心の内に／深い愛を浸透させ、暗愚な／地上世界を越えた、／超越的境地に誘う。(1004-13 行)

この超越的境地においては、幻想的観念、敬虔の念、恍惚境、無念無想、自然愛、人類愛が沸き起こり、続く詩行にある通り、様々な公德心を生む。

美德とか、名声とかに心新たに感銘し、／愛や深き友情がもつ心の交わりを尊び、／その他あらゆる公德心に目覚める。(1027-29 行)

サンプルックの指摘する通り、メランコリーが公德心を生むという理解はトムソンに特有である¹⁴¹。そして、公德心がメランコリーによって育まれるのであれば、メランコリー的な怠惰の城は公德心を育む、言い換えれば、公共善を生む場となる。

サンプルックはこう指摘する。『怠惰の城』では、夢想による想像力を美德と結びつけることが歌われている。これは、トムソンが詩人としての大義を公

共の徳にあると考えていたことを示す、と¹⁴²。確かに怠惰の魔法使いは人々を耽溺に誘って心と身体を弱らせる。そして、墮落した者を地下牢に閉じ込めることで二度と外に出られないようにもする。しかし一方で、心身穏やかに黙想を重ねることで想像力を涵養し、その想像力によって徳を積む場所を提供することで、最終的に、怠惰の城は外の世界につながる公共性を有するのである。

もちろん、勤勉な労働が公共に資することは明らかで、勤勉な労働が墮落を防いで個人の徳を高めるのみならず、社会を、そして国家を繁栄させるという考えは、トムソンが『四季』において歌っていたところである¹⁴³。しかし、勤勉の対である怠惰にも、メランコリー的な黙想や天才の源として公德心を育む側面があるという意味で、怠惰の城は完全に内に閉ざされた快楽の城ではなく、内部で醸成された公德を発揮するために開かれている。メランコリーの想像的な側面が積極的に理解された 18 世紀にあつて、とりわけ想像力の公共性を意識したトムソンは、最終的には勤勉同様に善をもたらすものとしても怠惰を捉えていると見ることができる。

IV 公共善を生む開かれた城

怠惰の城は放縦が蔓延した駆逐すべき場として描かれるわけだが、メランコリー的な黙想を提供してくれることからして、欲望や快楽だけを追求する救いようのない場として捉えられるわけではない。ウォルポール政権の批判を念頭に書かれたこの詩では、怠惰の城はいわば当時のイギリスの縮図であり、その城 (= イギリス) が勤勉の騎士をもってしても救いようがないのであれば、もともこもない。城には救われる余地がなければならなかった。

城は荘厳な森の中にあり、魔法使いのいる門を通らなければ入れない。しかしこのことは、外界と区別された特別な空間でありながら、城の一部は開かれ、出入りができることを意味する。この城のように部分的に開かれた空間を、耽溺の場として、観想の場として、また、精神の安寧の場として捉える議論は、とりわけ、イギリスの庭園を巡る言説において、トムソンの時代に至るまで繰り返されていた。

1. 庭園を巡る言説

イギリスの庭園を巡る言説については、安西信一が幅広い資料を渉猟してその壮大な言説空間を描い

て見せた。ここで安西の議論に依拠しつつ、イギリスの庭園を巡る言説を整理しよう。

安西は、16世紀ベルギーの新ストア主義者リプシウスの『不動心』(1584年)を引用し、リプシウスの影響が18世紀のイギリス庭園論にまで及んでいたことを指摘する¹⁴⁴。リプシウスによれば、庭園は「肉体のためではなく精神のためのもの」であり、「私は閑暇のなかにも何らかの仕事を見出す。私の心はそこ〔庭園〕では労働せずにも働き、労苦なくとも鍛えられる」と、庭園を活動の場、観想の場と見なす。リプシウスはさらに次のように言う。

私はそこで勤勉かつ熱心に読書に励んだり、そうでなければ、良き思考の種を心に植え込んだりする。そこから有益な教訓を心に蓄えるのだ。武具を武器庫にしまうようにして。この教訓は常に私の手元において、運命の女神の力と移り気に対抗する。¹⁴⁵

勤勉の騎士が運命の網を持って怠慢を駆逐しようとしたように、耽溺に浸るだけで精神的活動を怠る者は運命の女神に抗えない。しかし、観想によって教訓が得られれば、運命の決定的な力にも対抗することができ、庭は本質的にそのための場である。そして、庭園内での観想が最終的に効力を発揮するのは、庭の中においてではなく、その外部においてである¹⁴⁶。すなわち、観想の場はある部分で外、すなわち公共に開かれており、逆に閑暇と怠惰の温床となるのは完全に閉じた庭である。

リプシウスの言説がそうであるように、庭は伝統的に隠遁の場であると同時に観想の場と見なされてきた¹⁴⁷。観想の庭の開かれた公共性を称揚し、閉ざされた庭園を否定するリプシウスの言説は、その後、イギリスで綿々と引き継がれることになる。例えば、ピューリタン革命期の革命派詩人ジョン・ミルトンやアンドルー・マーヴェルの作品には、当時盛んに行われた囲い込みを批判するピューリタンの視点を前提に、閉ざされた庭を否定する心性が現われ¹⁴⁸、また、同じくピューリタン時代の農業思想家サミュエル・ハートリブは公共善への奉仕を重んじ、大きな庭に準えられるイギリスは私的な利害のために閉じてはならず、その開かれた大きな庭での林業や農業を公共善への奉仕と捉えた。そのため、逆に、閉

ざされた庭は公共善への配慮を欠いたものと理解された¹⁴⁹。

王政復古期に入ると、開かれた観想の庭が有する公共性の理解は継承される一方、革命を経た平和と享受のこの時代に復興したエピクロス主義(快楽主義)の影響で、庭園は革命の混乱を経て得られた楽園となり、そこは、富に満ち、実り豊かで、個人的な心の安寧と感覚快を享受する場としても理解された。王党派詩人カウリーは「王立協会に贈る頌歌」において、「今や果樹園は開かれ自由だ。〔中略〕望む者は誰でも、来たりて入れ。熟した果実を眺めて、さあ、思う存分集めよ」¹⁵⁰、と歌う。また、ウィリアム・テンプルは、『エピクロスの庭園』(1685年)において次のように言う。

エピクロスは自分の庭園において生涯を過ごした。庭園で学び、庭園で体を動かし、庭園で哲学を教えた。そして実際、エピクロスが最も重要な目的とした精神の平静と身体の安らぎを、庭園以上に与えてくれる場は他にないであろう。甘美な空気、心地よい香り、緑豊かな植物、清潔で軽い食事、仕事と散歩の運動、そしてとりわけ、心配や苦勞の種を免れていることで改良されるように思われるのが、観想と健康、感覚と想像力の楽しみ、そしてそれゆえの身体と精神の平穩である。¹⁵¹

このエピクロスの快は元来個人的なものであり、公共性とは直接結びつかない。しかしながら、テンプルが述べる庭園における感覚的な快は、墮落した放縦や肉体的快楽への耽溺を許容するものではない。感覚と想像力を喜ばせることによって、精神と肉体に静穩をもたらし、かつ改良していく。つまり、テンプルの感覚的な快は、心身の墮落ではなく向上へとつながる快である。

革命を経たイギリスで哲学的な黙想の場として、また、感覚的な快を得る楽園として捉えられた庭園は、続く18世紀に文字通り開かれることになる。ジョゼフ・アディソンが庭園を論じた時、彼は庭園を観想の場、とりわけ自然観想によって精神の道徳的習慣が得られる場として、また、精神の安寧をもたらすエピクロスの快い隠遁の場として理解した¹⁵²。当然この庭は開かれ、観想によって得られる道徳的習慣は公共善を増大する事につながるものとさ

れるが、アディソンのこの言説は、当時登場し始めた風景式庭園、すなわち囲いのない、文字通り外に開かれた新しい庭園様式と呼応している。

アディソンは『スペクテイター』誌の1712年6月21日の411号に掲載した論考で、自然のなかでの精神の安寧は、自然から与えられる想像力（あるいは空想）の快によってもたらされ、この快があれば怠慢に陥ることも、内向きのメランコリーになることもないと言う。

実際、無為で無垢でいる方法を理解し、罪にならないようにしてあらゆる快を味わえる人は、まずいない。というのも、気晴らしは常になにかの美德を犠牲にしており、仕事を一歩でも離れると、不道徳や愚行に陥ってしまうからである。従って、人は努力して純粋な快の範囲をできるだけ広げた方がよい。安全にその快に退くことができ、賢明な人なら恥じ入ることなく得るような満足をそこに見出すためである。想像力の快とはこうした性質のものである。それはより重大な事に取り組む際に必要な思考の耐性は必要としないし、一方でより感覚的な喜びに伴って生じやすい怠慢で無気力な精神状態に沈むようなこともない。

さらに言えば、空想の快は悟性の快よりも健康に資する。脳の激しい働きを伴うからである。快をもたらす光景は、自然のものであれ、絵画や詩の中のものであれ、心地よい影響を精神のみならず身体にも与え、想像力をはっきりと明確なものにするのに役立つ。ただそれだけではない。そうした光景は悲しみやメランコリーを追い払い、快く好ましい動きに動物の生気を持たせてくれるのだ。¹⁵³

想像力の快は感覚と趣味によって得られる美的芸術的な快であり、墮落して放縦や無気力に陥る類の快とは異なる。ポープが1731年の『バーリントン卿への書簡詩』において、時の宰相ロバート・ウォルポールと王妃カロラインの奢侈を批判する際にも、この政治家と宮廷の墮落の要因は（＝想像力の快を得られないのは）、感覚と趣味を欠いているからだと見なす¹⁵⁴。ポープがこの詩の中でウォルポールを風刺して登場させたのがティモンで、ティモンのヴィラと庭園についてポープは次のように書く。

ティモンのヴィラで一日過ごそう。そこでは皆が口々に叫ぶ。「何たる金の無駄遣い!」。[中略]次に称賛が求められるのは彼の庭園。四方に目を向けると、見よ壁だ。快い錯綜が介入することもなく、また、人工の荒野が景観を複雑にすることもない。木立と木立は互いにお辞儀する。(99-117行)¹⁵⁵

ティモンのヴィラは豪奢の極み。その庭園は、想像力の快を与えてくれるような快い錯綜を含む自然な庭園ではなく、人工的な整形式庭園であり、そして壁で囲まれ閉じている。

庭が開かれているか否かという点については、先に言及したバートンの『メランコリーの解剖』の表題扉を見ても良い¹⁵⁶。この表題扉の中央上部には、庭にいるデモクリトスが片手を頬にあてるメランコリーのポーズで描かれ[図63]¹⁵⁷、この庭にある草はメランコリーに効く薬の素になると言う¹⁵⁸。バートンによる表題扉についての説明では庭自体についての言及はないが¹⁵⁹、塀で囲まれ閉じたこの整形庭園を見ると、奥の塀に半円アーチを備えた出入口がある。その戸は閉じられてはいるが、出入口があることで、庭園は部分的に外に開かれていることが示唆される。

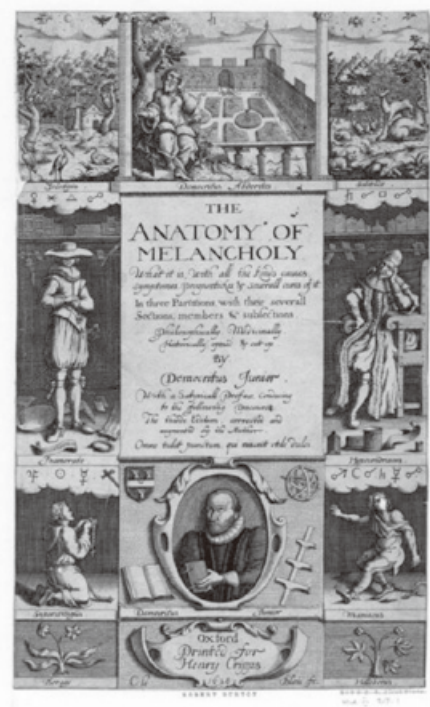


図63 ロバート・バートン著、クリスティアン・ル・ブロン版刻『メランコリーの解剖』扉絵、エングレーヴィング、紙、1628年出版、ロンドン、大英博物館 [1895.1031.265]。

以上のような議論を経て、18世紀の庭園は、エピクロス的な感覚快を享受する場として、徳を積む観想の場として、そして、公共性を備えた開かれた場として理解されるに至る。この庭園をめぐる言説を踏まえてトムソンの怠惰の城を見ると、怠惰の城がこの三つの場として描かれていることに気が付く。

2. 感覚快を得る場としての城

まず、アディソンが言う想像力の快、感覚的快を喚起する源である自然が、怠惰の城にはある。魔法使いが「自然のはぐれ者」(第一章11節)と呼んで蔑む外界の現代人は、自然と乖離した状態にある。ところが、この城の内は、「少年時代の遊び戯れ、森も、山も、あてどなく／せせらぎ流れる小川も、何もかもが楽しかった、／あのいとも簡単に得られた幸福感」(第一章48節)を味わうことのできる自然豊かな場所である。感覚と趣味を備えた者であれば、こうした自然の刺激によって、想像力の快を得ることができるはずだ¹⁶⁰。また、自然の風に共鳴して音を出すアイオロスの豎琴が城に置かれているが、その奏でる調べは、「人為の技では及びもつかぬ、奔放なる自然の歌声」(第一章41節)である。人工的な整形庭園を批判し、想像力の快を刺激する自然の風景式庭園を称揚した18世紀の庭園の言説に共鳴するがごとく、自然の力を借りることによって作られた音楽は、人工の旋律にはない正に感覚に訴えるような「心中深く突き刺してくる力」(第一章41節)を持つ。

確かにこの城は、「明るい太陽の光でさえ殆どさし入らず、／従って昼とも夜とも見分けがつかない程の、／鬱蒼たる森の中」(第一章7節)に位置しているし、外界から隔絶された閉じた状態は、この城が墮落した世界であることを強調する。なるほど、「この上なき快樂の海の中に／汝らを浸してやろう」(第一章12節)とか、「心地よい眠りを妨げられる懸念すらない」(第一章14節)とか、「純粋なのんびり生活、漫然たる散歩だけの世界だ」(第一章15節)など、城が労苦のない安穏とした世界であることを繰り返す魔法使いの誘いも、この世界に溢れる放縦の空気を想起させる。しかしながら、城の自然によって喚起されるエピクロス的快は、人を怠けへと墮落させるものでは本来なく、詩心を刺激したり、利益をもたらす栽培活動を促し、また、瞑想へと至るこ

とが望まれる。

林の中を散策して、汝の詩心を満足させる事もでき、／花の咲く草木を栽培して常春を楽しむ事もできようし、／こっそり城を抜け出して、小川のほとりに／釣り糸を垂れ、胴体に赤い斑点のある小魚を／捕まえる事もできよう。そうしている間も、瞑想する、／汝の耳には、小鳥達の囀りに和して、小川のせせらぎとか、／西風の囁き声など、森の音楽が聞こえるのだ。(第一章18連)

想像力の快を与えてくれる自然は、当然、開かれており、庭であれば自然に倣った風景式庭園が相応しいが、実際トムソンは別の詩で整形式庭園を批判している。それは1735年から36年にかけて出版した無韻詩『自由』における詩行で、富に溺れる者を批判するなかで、手の入った庭、つまり整形式庭園を、精神を陶冶しない庭だと批判する。

ご覧よ、富という破滅に至り、散財する者は／ただ落胆、痛み、恥を買う。／見よ、この広間には、心のこもった親切な歓待ではなく、／野蛮な暴動が溢れている様を。／泡立つように沸き立つ横溢のなか、／皆の乱痴気ぶりはまるで狂宴。／注意せよ、下品に積み上げられた木や石に。／こうした林園や庭園では、あちこちきれいに刈り込まれ、／そして自然がおこがましい技芸によって虐げられ、／森の精は嘆く。見よ、テーブルのご馳走も／嫌悪感を催し、料理の椀も楽しみをもたらさない。／精神に食べ物を与えてくれる真実は、ここには招かれないし、／機知も、理性を楽しませるワインを愉しまない。(第五部157-69行)¹⁶¹

少なくとも城の中には想像力の快を刺激するだけの自然が存在する。重要なことは、城の中でこの想像力の快を得るだけの感覚と趣味を持ち、精神を高め徳を積むことにある。

3. 徳を積む場としての城

こうした空間に身を置くことで本来期待される結果、すなわち公共善につながる効果は、魔法使いも歌うように、「美德」と同義の「精神的平静」(第一章16節)を得ること、そして「博愛精神」(第一章15節)を持つことである¹⁶²。もちろんこれは魔法

使いの口車であるとは言え、実際、この城の客人には次のような優れた感性の持ち主もいて、彼はこの城の美質を見抜き、また周囲を楽しませてくれた。

洗練された感性を具え、／自ら多様な美質の持ち主故、どんな美質も見逃さなかった。／沈着にして心暖かく、慈悲深くも確たる精神の人であり、／誰よりも悪に感化されることのない人物であった。／文芸の神々が彼らの領土に彼を導いて、その奥義を知らしめ、／自然の女神の聖なる愛を彼にもお授けになった為、／幾度となく、彼はこの谷の住民を大いに楽しませたのである。(第一章 65 節)

この洗練された感性の持ち主は、トムソンやボウプのパトロンでもあったジョージ・リトルトン卿をモデルとしている¹⁶⁵。

トムソンは、リトルトン家がウースター州に所有していたハグリー・パークを、1743年に訪れている。この自然の手が見事に作り上げた庭園を訪問したことについて、トムソンは恋人エリザベス・ヤングに宛てた同年8月29日の手紙で言及しているほか¹⁶⁴、『四季』の「春」では、ハグリー・パークの自然がエピクロス的な快をもたらし、この庭が哲学的瞑想へと導いてくれる場所であることを歌いあげる。

湧き出た水が／辺り一面に溢れ、飛沫をあげて流れ落ちる／滝が、木立の間に煌めき見える谷の中、／木々に覆われ、苔むす岩だらけの所を、／君は静かに歩き、自然の巧まぬ手で、／見事適当な配置で散りばめられ、／小高い丘陵地帯をこんもりと覆った、／荘厳な樅の根元に、悠然と腰を下ろして、／片山里の様々な声にうっとり／耳傾ける。牛や、羊や、小鳥の声とか、／そよ風の密かな囁きや、絡み合いつつ、／這い広がる、樹根の間をサラサラ／流れ、心和ませるような水音を立てる、／小川のせせらぎ。こんな陶酔境から、／君が哲学的瞑想に入り込むと屢、／学問好きで敬虔な君の眼前に次々と、／美しい神秘の光景が現れる。(909-25行)

このハグリー・パークでの瞑想と同じように、リトルトン卿のような学問好きで敬虔な人物であれ

ば、怠惰の城も哲学的瞑想の場になりうる¹⁶⁵。彼をモデルとした優れた感性を持った男の美德は文芸の神々や自然の女神によっても支えられており、結果として彼が他者を喜ばせることで、この城は大いなる公共善を生み出す場所となる。

4. 公共性を備えた開かれた城

そして「まこと美德の申し子」(第一章 66 節)であるこの男は、当然のことながら、「やがてこの城から出ていくつもりでいる」(第一章 65 節)。惑うことなく想像力の快を得て瞑想する者は、その成果を持って公共の善に資するべく、再び外の世界に戻るのだ。

もちろん、この城には快に溺れて墮落する人物が多いことは確かで、手遅れとなってしまうこともある。「この地の地下深い所に、陰鬱な土牢」(第一章 73 節)があって、その「暗い窖」に入ってしまうと、文字通り喰は「堅く閉じ」、二度と開くことなく「息を引き取」(第一章 74 節)るのを待つのみである。閉じた牢から外に出ることは最早できない。それが憂うべき状況であることは間違いない。しかし、怠惰の城はリトルトンのような人物が美德と博愛精神を得て元の世界に戻る余地を残し開かれているという点において、完全には閉じていない救いのある場所である。そしてそのような徳の持ち主が外に出ようとする強い意志は、どのような快楽や誘惑にも屈することはない。彼らが「この静かな森をどうしても離れたいと言うのなら、／残念ながら、我々にはどうする事もできない」(第一章 66 節)のだ。

このように、怠惰の城は、想像力の快を喚起する自然に溢れ、公共善を生み出す徳を積む場となり、そして開かれている。実はかつてのイギリスも同様で、人は「自然の糧により生きていた」(第二章 17 節)し、ひとつの理想的な庭として人と自然は共生し、個々人の精神は快で満たされ、そして、全体に資する有用性を持っていた。トムソンはかつてのイギリスをこう歌う。

美しい無垢の心と、／穏やかな平安と、素朴な喜びの種が失われず、／それらに酔いしれる時自ず精神が落ち着くのだ。／自然と人為、楽しみと有用とが一つになっている。(第二章 19 節)

有用な人為はイギリスの「自然のままの田園を美化」

(第二章 27 節) するが、「人為で自然の美が損なわれる心配はなく、／人為が加わってこそその美が倍加され」(第二章 28 節) た。つまり、横暴な人間の技による人工的な自然改良ではなく、自然の美をより一層高めるような、まさに風景式庭園を彷彿させる手さばきで、怠惰の城のアナロジーとして捉えられるこのイギリスという庭は、徳と善に溢れる地として改良されてきたのである。

ところが、感覚と趣味を備えていない者たちにとっては、徳を積み善を施すこの城(あるいは現代のイギリス)は快樂に溺れるだけの放縱の世界となってしまう、彼らは抜け出せない地下深い穴に落ちてしまう。勤勉の騎士は、ここは「あらゆる害悪が蔓延」る「見せかけの場に過ぎない」と城の人々に訴え、彼らそれぞれの美德を様々な領域の公共善のために活用しようと、城の外へ連れ出そうとする。

ある者は法曹界に、ある者は軍隊に連れて行こう。
／あるいは、夜空に瞬く星の荘厳な光によって、
／世の中の平和が保たれ、諸国が統御されるように、
／議会や、国際的外交の場に入って戴く者もいよう。
／または、地上の様相を一変してしまうような、
／発明発見する研究の場や、大繁盛の商取引の場や、
農業や、心を培う天職に誘いたい者もいる。
／更に、人心を高める文芸に携わって欲しい者もおり、
／名誉も、自然も、芸術も全て貴方方の裁量次第だ。(第二章 60 節)

つまり、怠惰の城は博愛精神を持って公共善を発揮する者たちのために外に向かって完全に開かれている。しかしながら、快樂に溺れ、勤勉の騎士の訴えに耳を貸さない連中は、自分たちが「山懐のこんな森の中で、美しい自然に囲まれ」ていることに満足し、「幸せは悪なのか」(第二章 66 節)とさえのたまう。彼らは囲いのなかで安住し、外に出ないその利己的な罪を理解しないのだ。

このように、怠惰の城を庭園、そしてイギリスとのアナロジーで捉え、その開かれた公共性を確認すると、トムソンが『怠惰の城』において取り上げた怠惰の概念が、マキロップの指摘した通り、怠けた無為に加えて、想像的な夢想状態と哲学的隠遁生活を含む概念であることがより一層明白となる。

(つづく)

* 印の書誌は出羽 (2016a) の、+ 印は出羽 (2016b)、# 印は出羽 (2018)、それぞれの引用文献を参照。

¹¹⁸ 隠遁による黙想や精神の涵養という主題は、サンプルブックの註解等で指摘される通り、先行するテキストとの関係が見出せる。ルクレーティウスの平穏な自然の理想 [ルクレーティウス (1961) 62-63 頁]、ホラティウスの山中の城における静けさと悦び [ホラティウス (1966) 185-87 頁]、モンテーニュの『エッセー』における、隠遁と孤独の理想とその喜びと楽しみ [モンテーニュ (2005-16) 2, 132-55 頁]、ポウプの「ウインザーの森」における隠遁生活での恵みや健康や心の安らぎ [Pope (1966), p.44, ll.235-40] などである。

心身の安寧はエンブレムでも取り上げられ、例えば、黙想を促す心身の休息を過度な労働と対比するホイットニーの《休みのない人生》や《時に休息を取れ》 [+Whitney (1586), pp.89, 103]、ホイットニーが参照したサンブックスの同じエンブレム [+Sambucus (1564), pp.132, 137]、ピーチャムの《静かに働く》 [+Peacham (1612), p.184] がある。

トムソン自身の作では、「春」(904-25 行)におけるリトルトンの哲学的瞑想、「夏」(1379-97 行)における山中への隠遁 [Thomson (1981), pp.46, 123-24]、また、1748 年の『孤独への賛歌』もある。この 1748 年の詩では以下のように歌われる。「やあ、常に心地よい孤独よ、／賢明と善の友よ。／しかし、その神聖で鋭い視線から／愚か者や悪人どもは急いで逃げる。／ああ、なんと素晴らしいことか、汝と共に歩くことは、／汝の囁くような語りを聞くことは。／これが無垢と真実を与え、／最も冷淡な心を蕩けさせる。」(1-8 行)

* Thomson (1986), pp.280-81.

1736 年にロンドンを離れリッチモンドに移り住んだトムソンが、隠遁生活の理想について語っていることを考慮しても良い。彼は 1748 年 4 月半ば頃に友人のウィリアム・ペイターソンに宛てて、次のように書く。「隠遁と自然に対する私の情熱は、日々増々高まるばかりである。」同じ手紙の中で、トムソンは『怠惰の城』が間もなく出版されることに触れている。以下参照。
* McKillop, ed. (1958), pp.195, 197.

¹¹⁹ * 林 (1998) 3 頁。

¹²⁰ 古代から近代、現代に至るまでの西洋のメランコリー概念の変遷は、以下の大著が辿っている。クリバンスキー、パノフスキー、ザクスル (1991)。この本の初版は 1964 年出版だが、1989 年に出た仏語版に新たに加えられた序文には、18 世紀のアディソンらの言説も引用され重要。以下参照。Klibansky; Panofsky; Saxl (1989), p.8.

¹²¹ 七つの大罪の一つである怠け (acedia) については様々な議論が重ねられ、例えばトマス・アクィナスは『神学大全』で、怠けを怠惰、病、悲しみ、とした。以下参照。松根 (2006)。ただ、神学において、怠けは非難すべき罪として単純に否定されていたのではない。というのも、怠けは善への配慮からくる苦悩や絶望の状態でもあるからだ。以下参照。アガンベン (1998) 17-25 頁。

¹²² バートンによれば、怠け (idleness) はあらゆる災厄の主因であり、悪魔が安らぐ場所である。怠けは心と体の両方に害をなし、特に孤独な状態に置かれると、強烈なメランコリーを引き起こす。バートンは、怠けを貴族につきものであると彼らを非難するが、一方で、怠けも初めのうちは、「空想をめぐらし、空想的で愉快な楽しみで心落ち着かせることができる」。問題になる

のは、その時間を「どのように過ごせばよいのかを知らない」者である。自発的孤独 (Voluntary solitarinesse) も同様に、考えを巡らせることで心地よい快をもたらすが、問題はその状態から「ほとんど戻ってこない」ことである。実際、パートンは次のように、孤独が専らメランコリーに陥るのではないと言う。「とはいえ、有益な瞑想や黙想はあるし、受け入れられる種類の孤独があることも否定できない。[中略] それ [孤独] を正しく用いれば、楽園、地上の天国となり、身体に、そしてそれ以上に精神に良い」。以下参照。Burton (1989-2000), pp.241, 243-244. パートン (2010) 61, 63, 64 頁。ただしパートンは、哲学的宗教的黙想を促す状態を閑暇 (leisure) という表現を用い、否定的な側面を強調した怠け (idleness) と区別した。以下参照。Sakakibara (2019), pp.96-98.

哲学的瞑想を促すものとして古代から称揚された閑暇 (otium) については、ルネサンス、さらにそれ以降の時代にも、精神を陶冶する側面と怠けを引き起こす側面の両面が常に問題とされてきた。以下参照。Vickers (1990)。『怠惰の城』もその議論の系譜に位置付けられるだろう。

¹²³ アリストテレスに帰されていた論考「賢さ、知性及び知恵に関する諸問題」が有名である。以下参照。アリストテレス (2014) 590-91 頁。この論考では、メランコリーの気質の別の特徴として肉欲があることも述べられていて、メランコリーはエロティックな快楽や欲望とも結びつく。以下参照。アガンベン (1998) 32-35 頁。

¹²⁴ [Addison & Steele] (1987), III, no.419, p.572. cf. Moore (1969), pp.185-86.

¹²⁵ 大崎 (2011) 18, 27 頁。大崎の引用する通り、ロマン主義の時代のフランスの作家シャトブリアンは、『キリスト教精髄』(1802年)でアメリカの荒野の風景がメランコリーだと言う。

¹²⁶ 例えば、サンブクスのエンブレム「われわれはすべて好奇心によって消耗する」では、知的な創造性と同時に、情念上の自己破壊を生み出す潜在的気質としてのメランコリーを、火山の調査で命を落としたプリニウスにあてはめ、過度な好奇心が破滅をもたらすという教訓を伝える。以下参照。*Sambucus (1564), p.159. *伊藤 (2007) 265-68 頁。

¹²⁷ 例えば、リーパの『イコノロジーア』の1603年のローマ版では初めて木版画による寓意像が挿入されるが、そこでは、メランコリーと関連する「怠け Accidia」が「醜い、身なりの悪い老女で、座り、左手で頬を支えている」姿で、そして、「憂気質 Malenconico per la Terra」が「くすんだ色の男性」で「左手で開いた書物を持ち、勉強している様子」で描かれている。この二つは、既に言及した1709年の英語版 (図52)にもその表現が引き継がれる。1603年版では挿絵のなかった「黙想 Meditazione」は「成熟した年齢の女性」で、「山積みになった書物の上に座って」いて、「左手の上に頬杖をつき、思索に耽っている」。その姿は1709年の英語版では確認できる。以下参照。Ripa (1603), pp.2-3, 79-80, 309. *Ripa (1709), pp.1, 15, 51. リーパ (2017) 30-31, 85-86, 253 頁。英語版は1777年から79年にかけても出版されている。この英語版は1766年にウィーンで出版されたフランス語版に依拠していて、ルネサンス、バロックの時代を経て、18世紀にも寓意の観念が汎ヨーロッパ的に広がっていたことがよく分かる。以下参照。伊藤 (2017) 173-76 頁。

¹²⁸ 版刻は Jacques Firmin Beauvarlet [*Bénézit (1999), I, p.936; *Le Blanc (1854-90), I, pp.223-26, no.86; *Nagler (1904-

14), I, pp.352-53; *Thieme & Becker (1907-50), III, p.125; *Turner, ed. (1996), III, p.463; *Williamson (1903), I, p.103]。

¹²⁹ 版刻は Henri-Simon Thomassin [*Bénézit (1999), XIII, p.604; *Le Blanc (1854-90), IV, pp.31-33, no.40; *Nagler (1904-14), XX, pp.546-49, no.28; *Thieme & Becker (1907-50), XXXIII, p.70; *Turner, ed. (1996), XXX, p.746; *Williamson (1903), V, p.172]。

¹³⁰ Beatie, et al. (1818), titlepage. 版刻は John Henry Robinson [*Bénézit (1999), XI, p.782; *DNB (2004), XLVII, pp.374-75; *Le Blanc (1854-90), III, p.343; *Nagler (1904-14), XV, pp.1-2; *Thieme & Becker (1907-50), XXVIII, p.439; *Turner, ed. (1996), XXVI, p.473; *Williamson (1903), IV, p.255]。

¹³¹ クリバンスキー, パノフスキー, ザクスル (1991) 333, 347 頁。

¹³² 版刻は William Wynne Ryland [*Bénézit (1999), XII, p.140; *DNB (2004), XLVIII, pp.473-75; *Le Blanc (1854-90), III, pp.388-89, no.35; *Nagler (1904-14), XV, pp.518-21, no.8; *Thieme & Becker (1907-50), XXIX, p.259; *Turner, ed. (1996), XXVII, p.463; *Williamson (1903), IV, p.308]。

¹³³ Broome (1796), titlepage. 版刻は W. Hawkins [*Thieme & Becker (1907-50), XVI, p.166]。

¹³⁴ 『ブルク・ブーズビー卿』は、16世紀エリザベス朝時代の横臥肖像画の形式、及びそれらの肖像画に備わるメランコリーの主題を引き継ぎつつ、亡命のなかで思索を積んだルソーがブーズビー卿と重ねられている。ブーズビー卿の手前に小川が流れているが、18世紀後半の詩で水がメランコリーの象徴として歌われる例を踏まえると、この小川はブーズビー卿のメランコリー的特質を示すものとして理解できる。以下参照。Cumings (1968), p.664. それらの詩より時代は数十年遡るが、怠惰の城にある噴水 (第一章 27 節) や小川のせせらぎ (第一章 18 節) も、城がメランコリー的な場であることを示すものと読めるかも知れない。メランコリーのイコノグラフィーについては、以下参照。Roberts, ed. (1998), II, pp.583-89.

¹³⁵ Dodd (1798), facing p.151. 版刻は Charles Warren [*Bénézit (1999), XIV, p.458; *DNB (2004), LVII, p.470; *Nagler (1904-14), XXIII, pp.504-05; *Thieme & Becker (1907-50), XXXV, p.167; *Williamson (1903), V, p.336]。

¹³⁶ Johnson (1755), II, n.p.

¹³⁷ *Sambrook (1991), p.273.

¹³⁸ 既に言及したジョージ・チェイニーなど (脚注17)、18世紀の様々な医学書でも扱われたメランコリーは、モンテスキューなど国外からもイギリスの病と見なされ、イギリス特有の気候や東風との関係も取り沙汰された。以下参照。Moore (1969), pp.179-235.

ポウプの『髪略奪』(1712年初版)の詩編4に描かれる気鬱の女王は、気鬱の岩屋に住み、そこには気鬱によって壺やポットに姿を変えられてしまい、もはや外には出られない人たちがいる。以下参照。出羽 (2019) 5-6 頁。ポウプは1717年の書簡詩『エロイザからアベラードへ』にも擬人化されたメランコリーを登場させる。以下参照。Dixon, ed. (1972), p.149.

また、まさしく『メランコリーの快』なる詩集が、『怠惰の城』が出版される前年の1747年に出版されている。これは、トムソンの知り合いの詩人ジョゼフ・ウォートンの弟であるトマス・ウォートンが、オクスフォードのトリニティ・カレッジの学生だった1745年に書きあげ、その2年後に出版したものである。トムソンとウォートンの関係については、*Sambrook (1991), p.253.

- ウォートンについては、*DNB (2004), LVII, pp.518-21. この詩で詠われる擬人化された女性のメランコリーは、次のように、洞窟の中にいる。「さあ、来たれ、思考の女王、メランコリー！／さあ、物憂げな表情で、そして確固たる歩みで、／陰気なイチイの木に囲まれた汝の洞より外に出でよ」。そして、メランコリーは外に出てくることで、黙想によって得られる喜びを我々に与えてくれる。「メランコリーが与えてくれるこの喜びは、／彼女の狂気のお祭り騒ぎよりずっと幸福なものである。／黙想によって教えられる、深く心に響くこの喜び。」洞窟の内にいるメランコリーが外に向けて発揮されれば、メランコリーは喜びをもたらす。Warton (1802), I, pp.92-94.
- ¹³⁹ Johnson (1755), II, n.p. 本稿では林訳の * トムソン (2002) から詩行を引用してきたが、spleen, vapour については、メランコリー (melancholy) と区別するために、それぞれ、気鬱、気塞ぎの訳語を充てる。
- ¹⁴⁰ 天才と狂気、そしてメランコリーについては、以下の論考も参照。ウィットコウアー、ウィットコウアー (1969) 217-35 頁。
- ¹⁴¹ Thomson (1981), p.376, n.1004-5. トムソンは友人に宛てた 1748 年の手紙でも、「気鬱にも慈悲に溢れて感じの良いものが確かに存在する」と書き、心の塞いだ気鬱／メランコリーも他者に慈悲的な公德につながるものがあることを理解している。以下参照。*McKillop, ed. (1958), p.198.
- アディソンも、先述の通りメランコリーの快を認めながら、徳につながる快活さ (cheerfulness) や気立ての良さ (good-nature) と内向きのメランコリーとははっきり区別する。「美德を飾る二つの装飾がある。それは美德を最も素晴らしく見せ、美德の全てを美しくする。その二つとは快活さと気立ての良さだ。通常この二つは歩みを共にする。なるほど、人当たりが良くないと他人から感じが良い人とは思われない。この二つはいずれも徳を備えた精神に欠かせないもので、精神が熟慮を要する際にもメランコリーを寄せ付けない。[Addison & Steele] (1987), II, no.243, p.445. cf. *Sambrook (1991), p.266.
- ¹⁴² *Sambrook (1991), p.274.
- ¹⁴³ 例えば以下参照。Thomson (1981), pp.125-33, II.1446-1619, pp.146-50, II.43-150.
- ¹⁴⁴ 安西 (2000) 28-33 頁。
- ¹⁴⁵ リプシウスの『不動心』は 1594 年には英訳が出版されており、ここでの引用はその英訳テキストを基にした以下の注釈版を参照。Lipsius (2006), pp.79-80.
- ¹⁴⁶ 安西 (2000) 31-32 頁。
- ¹⁴⁷ 安西 (2000) 109 頁。古代のアテナイにプラトンが開園した哲学探究の場としての庭、あるいは思索を含む閑暇の場としての小プリニウスのトスカーナにあったヴィラ庭園の伝統は、ルネサンスの時代に、例えば、14 世紀にはペトラルカが、また、15 世紀にはコジモ・デ・メディチが「心を耕す」ためのカレッジのヴィラ庭園において引き継ぐ。以下参照。桑木野 (2019) 26-29, 54-56, 86-95 頁。
- ¹⁴⁸ 安西 (2000) 36 頁。
- ¹⁴⁹ 安西 (2000) 47 頁。
- ¹⁵⁰ Cowley (1967), p.167.
- ¹⁵¹ Temple (1963), p.10. ただシテンプルは、このエピクロスの快が「公共的な務め」とは相容れないものだ」と述べる。エピクロスも「自分の庭園において生涯を過ごした」のであり、一度隠遁して外に出ることのない庭園は、観想が行われても成果を発揮できない点で、公共

性を欠いてしまう。しかしテンプルは、別の点で庭園の公共性を認めている。彼曰く、「それ [造園] と建築は、無から美しい構造と外観を組み上げる創造である。全ての個人住居の便利さや快を作ることはもちろん、多くの人手を雇い、貧しい者や職人に多くの金をまわすことによって、自国に対する公共的な奉仕となる。」

Temple (1963), pp.10, 31.

¹⁵² 安西 (2000) 103, 115-16 頁。

¹⁵³ [Addison & Steele] (1987), III, no.411, pp.538-39.

¹⁵⁴ 安西 (2000) 147-53 頁。

¹⁵⁵ Pope (1993), pp.142-44.

¹⁵⁶ これは、コーベットとライトバウンが指摘する表題扉の 4 様式の内、仕切り枠を幾何学的に組み合わせた分割型様式にあたる。以下参照。*コーベット&ライトバウン (1991) 13 頁。*ヘルトゲン (2005) 132 頁。クリバンスキー、パノフスキー、ザクスル (1991) 557 頁、脚注 2.

¹⁵⁷ 版刻は Christian Le Blon [*Bénézit (1999), VIII, p.381; *Thieme & Becker (1907-50), XXII, p.504].

¹⁵⁸ Mueller (1949), p.1077.

¹⁵⁹ Burton (1989-2000), I, p.lxii. パートンの説明と表題扉の表現のずれについても指摘される。Burton (1989-2000), IV, p.1.

¹⁶⁰ 同時に、趣味を備えた者であれば正しく享受できるような綴れ織り (第一章 37 節) や、広間を飾るクロード、ローザ、プッサンの風景画 (第一章 38 節) といった芸術作品があることから、この城が想像力の快が刺激される環境であることが分かる。

¹⁶¹ Thomson (1986), p.131.

¹⁶² 『四季』の「春」(272-308 行) においては、黄金時代の終わりが、博愛精神が失われてしまった時期と関連付けられる。以下参照。*Thomson (1986), pp.383-84, n.134.

¹⁶³ *Thomson (1986), p.388. リトルトン脚については、以下も参照。Thomson (1981), p.337, nos.906, 908.

¹⁶⁴ 先述の通り、『怠惰の城』創作の背景にはトムソン自身の怠惰があったが、彼が墮落した生活から抜け出すことができたのはエリザベスの存在故だった。エリザベスに宛てた情熱的なこの愛の手紙で、トムソンはまず努めて冷静に、心地よく魅力的なハグリー庭園の自然を褒め称える。「私たちが多くの時間を過ごした庭園は、大変楽しく、そしてとても魅惑的です。[中略] とりわけ私が惹かれたのは木々に覆われた隠遁の場所と、その中央を曲がりくねって通る沢です。この沢には深い森の木々が懸かり、水の流れによって生き生きとしています。この流れは苔むした岩から湧き出たものが滝状の流れを作り、そして穏やかな川の流れとして続いていて、想像しうる最も自然で喜ばしい光景を作り出しています。」しかし、この後トムソンは情熱が高ぶる。「あなたさえいてくれれば、この素晴らしい田園の隠遁の場所に住もうが、ロンドンの最もロンドンらしい街角に住もうが構いません」。愛する女性への恋文故、彼女がいれば環境など二の次となるのだろうが、「それでもあなたと共に田舎に暮らすのが [中略] 私の心からの願いです。そのようなこの上ない幸せを天が授けてくれますれば、これほどの幸せはありません」と、都会よりも田園の環境が幸福につながると書く。*McKillop, ed. (1958), pp.165-66.

¹⁶⁵ さらにトムソンは、1746 年にリトルトン脚とともにリーソーズ庭園を訪れ、その際の様子をこの庭を作ったウィリアム・シェンストーンが書き記している。「次に私たちはウェルギリウスの森に入っていった。彼 [トムソン] は、ここは詩的才能を持った人にとってなんと喜ばし

い場所でしょう、と言った。あなた [シェンストーン] が詩神に身を捧げていることは疑いようがありませんね。L [リトルトン] 氏が、この場所は詩的才能を改良してくれるでしょう、と言うと、T [トムソン] 氏は、ええ、また、詩的才能がこの場所を改良してくれるのです、と答えた。」*Sambrook (1991), p.253; *McKillop, ed. (1958), p.186. ウェルギリウスの森は、シェンストーンがリーゾーズ庭園における観想の場として構想した一角で、当初はこの古代ローマの詩人に捧げたオペリスクが建っていた。以下参照。*Turner, ed. (1996), XVIII, p.906.

観想の場に関しては、トムソンと親しかったポウプがトウィッケナムの庭園に、古代に端を発するグロットー、すなわち詩的連想を伴う沈黙と隠棲の場を作ったことを考えても良いだろう。以下参照。Dixon, ed. (1972), pp.166-68. 本来は南ヨーロッパの燦爛と降り注ぐ陽光を遮る目的もあったグロットーは、冷涼な気候のイギリスにおいては必ずしも好意的に受け入れられなかったようだが、この閉じた思索の空間で、ポウプが当時の皇太子を含めた野党政治家たちとウォルポール政権打倒を目して集まったという逸話は、閉じたグロットーが一方で公共性を有し、完全には閉じていないことを示す。以下参照。川崎 (1983) 313-38 頁。

引用文献

- ジョルジョ・アガンベン (1998): 『スタンツェー—西洋文化における言葉とイメージ』岡田温司訳, 東京, ありな書房.
- アリストテレス (2014): 『問題集』丸橋裕, 土屋睦廣, 坂下浩司訳, 東京, 岩波書店.
- 安西信一 (2000): 『イギリス風景式庭園の美学』東京, 東京大学出版会.
- 出羽尚 (2016a): 「トムソンの『怠惰の城』と怠惰の系譜(1)」『宇都宮大学国際学部研究論集』41号, 1-16頁.
- 出羽尚 (2016b): 「トムソンの『怠惰の城』と怠惰の系譜(2)」『宇都宮大学国際学部研究論集』42号, 43-55頁.
- 出羽尚 (2018): 「トムソンの『怠惰の城』と怠惰の系譜(3)」『宇都宮大学国際学部研究論集』46号, 1-8頁.
- 出羽尚 (2019): 「ポウプ著 1714年版『髪の掠奪』の挿絵—ウエヌスのイコノグラフィーとの関連—」『宇都宮大学国際学部研究論集』47号, 1-14頁.
- 伊藤博明 (2017): 『ヨーロッパ美術における寓意と表象—チェーザレ・リーパ『イコノロジーア』研究』東京, ありな書房.
- ルドルフ・ウィットコウアー, マーゴット・ウィットコウアー (1969): 『数奇な芸術家たち—土星のもとに生まれて』中森義宗, 清水忠訳, 東京, 岩崎美術社.
- 大崎周平 (2011): 「シャトーブリアンにおけるメランコリーと崇高」*Cahiers d'études françaises Université Keio*, 16, 17-32頁.
- 川崎寿彦 (1983): 『庭のイングランド—風景の記号学と英国近代史』名古屋, 名古屋大学出版会.
- レイモンド・クリバンスキー, アーウィン・パノフスキー, フリッツ・ザクスル (1991): 『土星とメランコリー—自然哲学、宗教、芸術の歴史における研究』田中英道監訳, 東京, 晶文社.
- 桑木野幸司 (2019): 『ルネサンス庭園の精神史—権力と知と美のメディア空間』東京, 白水社.
- ロバート・バートン (2010): 「ロバート・バートン『憂鬱の解剖』第1部第2章第2節」岡村真紀子, 川島伸博訳『京都府立大学学術報告』第62号, 37-66頁.
- ホラティウス (1966): 「諷刺詩集」鈴木一郎訳, 『ローマ文学集』泉井久之助ほか訳, 東京, 筑摩書房, 141-203頁.
- 松根伸治 (2006): 「倦怠と悲しみ—トマス・アクィナスの *acedia* について」『中世思想研究』48, 1-14頁.
- モンテーニュ (2005-16): 『エッセー』宮下志朗訳, 東京, 白水社, 全7巻.
- チェーザレ・リーパ (2017): 『イコノロジーア』伊藤博明訳, 東京, ありな書房.
- ルクレーティウス (1961): 『物の本質について』樋口勝彦訳, 東京, 岩波書店.
- [Addison, Joseph & Steele, Richard] (1987): *The Spectator*, ed. by Donald F. Bond, Oxford, Clarendon Press, 5vols.
- Beatie, James, et al. (1818): *The Wreath, Containing the Minstrel and other Favorite Poems*, London, Suttaby, Evance & Fox.
- Broome, William (1796): *The Poetical Works of Dr. William Broome*, London, C. Cooke.
- Burton, Robert (1989-2000): *The Anatomy of Melancholy*, ed. by Thomas C. Faulkner, Nicolas K. Kiessling, and Rhonda L. Blair, Oxford, Clarendon Press, 6vols.

- Cowley, Abraham (1967): *The Complete Works in Verse and Prose of Abraham Cowley*, ed. by Alexander B. Grosart, New York, AMS Press, 2vols.
- Cummings, Frederick (1968): 'Boothby, Rousseau, and the Romantic Malady', *The Burlington Magazine*, CX, pp.659-667.
- Dixon, Peter, ed. (1972): *Alexander Pope*, London, Bell.
- Dodd, William (1798): *The Sisters; or, the History of Lucy and Caroline Sanson, Entrusted to a False Friend*, London, C. Cooke.
- Johnson, Samuel (1755): *A Dictionary of the English Language*, London, Printed by W. Strahan for J. and P. Knapton, et al., 2vols.
- Klibansky, Raymond; Panofsky, Erwin; Saxl, Fritz (1989): *Saturne et la mélancholie: Études historiques et philosophiques: Nature, religion, médecine et art*, Paris, Gallimard.
- Lipsius, Justus (2006): *On Constancy*, translated by John Stradling, ed. by John Sellars, Exeter, Bristol Phoenix Press.
- Moore, Cecil A. (1969): *Backgrounds of English Literature 1700-1760*, New York, Octagon Books.
- Mueller, William R. (1949): 'Robert Burton's Frontispiece', *PMLA*, LXIV, pp.1074-88.
- Pope, Alexander (1966): *Poetical Works of Pope*, ed. by Herbert Davis, Oxford, Oxford University Press.
- Pope, Alexander (1993): *Epistles to Several Persons (Moral Essays)*, ed. by F. W. Bateson, London & New York, Routledge.
- Ripa, Cesare (1603), *Iconologia*, Roma, Appresso Lepido Faeij.
- Roberts, Helene E., ed. (1998): *Encyclopedia of Comparative Iconography*, Chicago & London, Fitzroy Dearborn, 2vols.
- Sakakibara, Tomoki (2019): 'Robert Burton and Idleness in the Anatomy of Melancholy' 『言語情報科学』 17, pp.87-102.
- Temple, William (1963): *Five Miscellaneous Essays by Sir William Temple*, ed. by Samuel Holt Monk, Ann Arbor, University of Michigan Press.
- Thomson, James (1981): *The Seasons*, ed. by James Sambrook, Oxford, Clarendon Press.
- Vickers, Brian (1990): 'Leisure and Idleness in the Renaissance: The Ambivalence of Otium', *Renaissance Studies*, IV-1, pp.1-37, IV-2, pp.107-54.
- Warton, Thomas (1802): *The Poetical Works of the Late Thomas Warton, B. D.*, Oxford, The University Press for W. Hanwell and J. Parker, 2vols.

***The Castle of Indolence* by James Thomson and the Ideas of Indolence (4)**

IZUHA Takashi

Abstract

When Thomson describes different people of different indolence in the castle's listless, peaceful and isolated atmosphere in *The Castle of Indolence*, he recognizes in indolence an analogy with the idea of melancholy which had been considered to have different connotations including negative states of mind like ill-temper, sadness and anxiety, and sources of creative and poetic imagination and genius for centuries. Using the terms 'spleen' and 'vapour', which were synonymous to 'melancholy' in the eighteenth century, Thomson sees some people in the castle having melancholic traits. Not only does Thomson see negative aspects of their melancholic traits like severe depression or hypochondria, but he also mentions positive melancholic expression of genius and imagination which some people in the castle display after their repose of mind. In the sense that those significant people display their imagination and genius and that the virtue they obtain through the melancholic and philosophical contemplation in the castle will contribute to the public good, this castle of indolence or of melancholy can be socially beneficial as those people, compared to the indulged people staying here for life, do not stay the castle so long but leave there to go back to their original society.

However, to let those socially beneficial people leave the castle, the castle itself must not be enclosed but be open. Openness characterises the eighteenth-century landscape gardens, which were characterised by their natural styles without formal compositions or apparent enclosing boundaries. The natural landscape gardens inspired the pleasure of imagination more with which people could cultivate their virtuous mind. Garden theorists argued that the openness of landscape gardens was significant in terms that the virtuous mind that we could obtain through the contemplation in the natural gardens should be also displayed outside the gardens for the public good. Openness for the public good can also be recognized in *the Castle of Indolence* as the castle does have a gate which anyone can go through and 'we found he would not be here pent'. It is impossible to persuade those who have cultivated their virtue to stay in this peaceful castle. For them, the castle is open all the time.

(2020年11月2日受理)